

## 死

天使が

真空管の中 蜘蛛の姿を模したフィラメントに腰かけ  
煙草の煙を 半開きの黒い瞳の前で 燻らしている

ぼくは

古びた そのアンプに 電源を入れた

まるで 融ける油絵のように

天使が

表情を変えず

燃えてゆく

緩やかに

黄金色に

微かに

硝子の筒を

アダージョと共に

震わせて

・・・ぼくの手も 震えている・・・

天使が燃え尽きる前に

小船に乗って 枯葉の中を 無音の風に 押され

電気技師のもとへ

行かねばならない

彼が

作り上げたという 新しい真空管を求めて

しかし

振り向けば ぼくが かつて

流した 言葉が 煙のように柔らかく

靡いては 音も無く 消えてゆく

そして

発することの 書くことの

許されない時が 満ちてくる

・・・病んでいるから・・・

早く

電気技師のもとへ  
行かねばならない

・・・明かりが必要なんだ・・・

だが

言葉を 零し過ぎた ぼくは  
もう これ以上  
落ち葉の上を 進めない  
もう これ以上  
言葉を 踏みにじるなんて できない

・・・ああ もう 真っ暗だ・・・

言葉よ ここでお別れだ  
詩句よ これが最期だ  
詩人よ 多くの詩人よ そう 多くの同胞よ  
遺言があるんだ  
ぼくの死を あなたの詩にしてくれないか  
ぼくを あなたの詩のなかに 閉じ込めてくれないか  
そうしたら ぼくは あなたの詩集のなかで ずっと生きていける

・・・生きたい 生きたい ぼくは 生きたいよ・・・

天使は 燃え尽きた  
明かりを失って 詩を書く術を失った 今  
ぼくという 詩人の在り方よ これが終焉だ  
ぼくが愛し 憎んだ 死という詩

「さようなら そして はじめまして」